

九谷焼の輸出

近代の九谷焼は海外輸出に活路を求めた。寺井・小松の陶商は維新まもなく



輸向九谷焼日用器(明治20年頃)(個人蔵)

い明治五年(一八七二)ころから「KUTANI」と刻印された製品を開港地神戸・横浜に運び、外国人バイヤーと直接取引した。十年代

三十年代には商機を求めて開港地に新店する者もいた。小松では新沢文四郎・酢屋久平・打田平太郎・松本佐平(左瓶)らが神戸に、筒井彦次・田島茂太郎・庄川庄次らが横浜に支店を構えた。

産地窯元は欧米の陶磁器市況をもとに配下の陶工・画工を駆使して素地・描画・色調の改良を重ね、欧米需要者の嗜好に合った花瓶・大皿・コーヒーク具など実用品を製出した。精魂込めた九谷陶磁器は欧米各地の万国

博覧会で好評を博し、「ジャパンクタニ」の声価が急速に高まった。能美九



松本佐平ブリュッセル博出品者代理人証明書(明治43年)(個人蔵)



松本左瓶「元禄装琴棋書画置物」(「九谷の紋様 明治・大正の陶工たち(2)」より) 明治33年/パリ博に出品した置物の原画(絵手本)

谷は輸出向生産を急速に拡大させ、二十一年には全生産の八〇%を占めた。だが、明治後期以降、輸出九谷は凋落の一途をたどる。技能未熟な画工による粗悪九谷が大量に生産・輸出されたこと、画材・色彩に対する欧米需要者の好みの変化に対応せずに急増期の画風を墨守したことなどが原因である。危機に直面した業界は、陶商・窯元・画工の三組合を統合して生産・販売体制をととのえ、描画の技能試験制

度を導入して上絵付の妙技を修得させた。また、松本佐平(左瓶)ら名工の逸品を万博に出品して「ジャパンクタニ」のブランドを維持する販売戦略をすすめた。

しかし、絵付改良は骨董趣味の装飾具模様の描画に流れ、欧米需要者の使用する実用具にそぐわなかった。万博出品にしても、具が美術装飾具の逸品に重点をおいたため、日用実用具の輸出増進に結びつけない九谷業界の思惑とくいちがいがあった。果たしてパリ博(明治三十三年)の日本陶器の多くは美術装飾具であり、受賞品の大半は美術工芸的な秀作であった。

その後の「ジャパンクタニ」は名工の美術工芸品を銘柄に欧米市場で命脈を保っていく。これに対して実用具生産に生計をつなぐ産業九谷は国内販路の開拓に発展の途を探っていく。大正末、能美九谷の輸

出向生産は一〇%台に減り、業態を内地向生産に移行させた。(太多 誠)



松本左瓶「金欄手花鳥図花瓶」(栃木県那須塩原市 鶏声磯ヶ谷美術館所蔵) 明治33年/パリ博に出品、銀牌受賞